

日韓古代文化交流史論(1)

—楽浪文化流る—

国士館大学客員教授 武藤 正行

目次

- 一、序説
- 二、金印出土地としての志賀島
- 三、楽浪文化流るの先駆、金印
—金印真偽論の展開—
- 四、楽浪文化、玄菟をわたる
- 五、楽浪文化論の駒井博士への若干の所見
- 六、楽浪文化流るの現代的示唆と歴史の非情

一、序論

有史以前の日韓古代文化は源を同じくするものであることを、別稿*で立証主義的立場より論証したのであるが、これに次いで日本の古代文化の黎明が韓半島の楽浪、帯方の漢文化の招来に負う事が極めて大きいことを、資料と史実の語る所を取り上げてみたいと思う。

しかしこの問題を取り扱うにはその前提には、東洋史、就中東洋考古学の造詣の深い事と、日本古代史、特に日本古典即ち古事記、日本書紀、万葉集に精通しているという、一人の学徒の研究には到底両立し難いと思われる程の厳しい条件が要求されるのであるが、その点からは筆者は到底その任ではないが、それにも拘らず敢えてこの問題に取り組むに至ったのは私なりに若干の理由をあげることができる。

その第一は、戦後従来国宝、重要美術品に対する厳重な再審査が行われる事になり、その際福岡県志賀島出土の金印が偽物であるとの学説が中央学界、就中東京国立博物館の後藤守一博士等を中心に大きな論議を呼び起こした。当時私は県の文化課の文化財保護係長の任にあり、直接この問題に対処しなくてはならない立場にあった。幸い地元には九大医学部の教授でありながら、未だ九州帝国大学にさえ考古学講座のない頃、九州考古学の草分けであり、かつ弥生式文化、就中甕棺研究の第一人者であり考古学界に「金石併用時代」の存在した事を主張し学界に定着せしめる程の実力者、中山平次郎氏の強力な学問的支援支持を得ること

ができたが、それにも拘らず悪戦苦闘の結果、兎に角文化財保護委員会の良識ある審査の結果、日本最古の金石文献資料として国宝第1号の再指定の承認を獲得する事に成功した。こうした因縁が敢えて暴虎憑河の勇をふるい筆をとらしめたのである。

その二は日韓トンネル研究会九州支部の第1部会の末席を汚している者として、日韓古代文化交流の問題の解明には、先ず地元会員の着手すべき立場にあるように思われ、その場合、金印問題は避けて通ることの出来ない問題であった。そこに偶々前編の続編をとの事務当局の要請を受け、これに答える始末になった次第である。

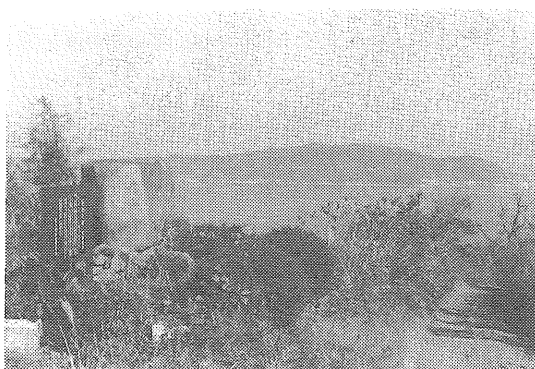
もっとも、日本古代国家生誕に関連して、前漢の武帝が西暦前108年衛氏の朝鮮を征服して韓半島北部に成立させた所謂漢の四郡、即ち楽浪郡、真蕃郡、玄菟郡、收屯郡が漢の文化を受容、温存していたが、高句麗の攻撃を受け西暦313年滅亡したが、その間、凡そ400年の長期にわたって楽浪郡を中心に、「楽浪文化」が繁栄したこと、そしてそれが日本の古代文化の黎明期に極めて大きな影響を与えたことについては早くより関心を持っていたので「楽浪文化」の語は格別深い印象を受けていたのであった。

勿論既に東洋史学の先達たちが、多くのすぐれた著書、論文を発表されていたが、最近といっても10数年前「中公新書」という啓蒙的小著の形式をとられているが、内容的には長年に渡る苦心の調査研究と円熟した学識を惜しみなく盛り込まれている故、駒井和愛博士の「楽浪—漢文化の残像」に深い感銘をうけたというより、それに導かれながら、特に日本古代文化とのかかわりの部分を私なりに取り上げてみることにした。

ここで今一つ指摘したいのは英国の歴史家アーノルド・トインビー(Arnold Toynbee)の文明論についてである。彼は英国の王立国際研究所教授、研究部長の任にあったが、大著「歴史の研究十巻」は「諸文明の間の挑戦と反応の理論により世界史を

体系づけようとした大規模な歴史叙述である」といわれている。それは歴史哲学から出発し、歴史社会学と世界史学と文化人類学にまたがる研究分野が独立した新しい学問分野として承認される資格を持ちはじめているといわれる世界の新バイオニアである。勿論このような大胆な学問的新分野開拓へのアプローチには学者たちの学問的批判があるのは当然である。我が国西洋史学の権威、林健太郎博士もソフトな表現ではあるが可なり鋭い批判をされている。私が特に彼をここで取り上げたのは、彼が中国大陸文明と日本文明との関係を論及している部分で「日本文明は中国大陸文明が世界文明の中心であるときは、その周辺文明として、それを受容して発展したが、15世紀以降世界文明の中心がヨーロッパに移ると、日本文明は今度はヨーロッパ文明の周辺文明として栄えた」という。彼の説は既に世界文明の中心がヨーロッパよりアメリカに移転している今日、現段階の日本文明は最早ヨーロッパ文明の周辺文明でないで、今日では日本の現実にマッチしない説明になっている。しかし古い時代、少なくとも15世紀以前にさかのばれば日本文明はトインビーの指摘したように中国の四大文明、漢、唐、宋、明の文化を受容してそれぞれの時代にそれに相応する自国の文化を開花させている。

楽浪文化は内容的には漢の文化の延長であってそれが韓半島の文化の先進地帯であった楽浪(ピョンヤン)帯方(ソウル)地方を通して如何にして我が国に流れ、且つ受容されていったかが、私の取り扱わんとするメインテーマである。



能古島也良岬より見たる志賀島

二、金印出土地としての志賀島

志賀の白水郎の 釣りしともせる
漁火の ほのかに妹を 見むよしもかも
(万葉集)

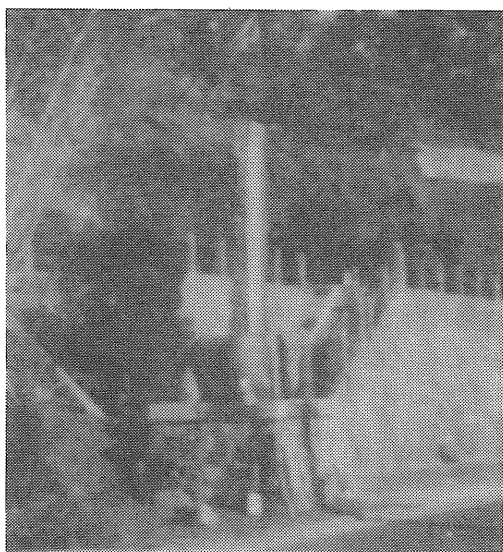
博多湾は玄界灘に面した最大最良の避難港であって、その歴史地理的条件は昔も今も変ることがないのであって中国大陸からの陸橋ともいえる韓半島を通過した漢の文化、即ち楽浪文化が上陸第一歩を印したのは実にまさにこの地でなければならなかった。そして湾の入口を制する景勝の地が、一つが「防人の島」といわれる能古の島であり、今一つが「神の島」といわれる阿曇氏に率いられた海人部族の拠点「志賀の島」である。志賀島を詠んだ歌は万葉集巻16「筑前国志賀白水郎歌十首」の他に十二首ある。その歌詞を見ると『釣る、漁火、塩焼く、藻刈る』等いずれも志賀海人部の歌は海洋民族の生々とした生き態を反映した民謡系の労働歌であった。

最初に表示した歌の大意は「志賀の漁夫たちが夜釣りしてともせる漁火がほのかであるように、ほのかにでも愛するあなたを見る手だてはないものであらうか」というのであって、前半の歌詞の三句は、「ほのか」という語を呼び起こすための枕言葉的なものである。

遙かに暗い波間に明滅する志賀の漁火を地方の博多の海浜から夕やみ迫る松林越しに眺めての風景で、かりそめの筑紫路の旅にある人には、ひとときわ旅情をかきたてられるものがあつたであらう。

金印問題の解明に先立って、最初に志賀島について述べたのは、金印偽物説を唱えられる方々が、大都会の大学の研究室や図書館で陸地測量部の地図を広げて、「奴の国」の中心より遠く離れた名もない離島に「奴の国王」の王位継承の象徴的価値ある金印が、無造作に埋没されている事の非合理性を追求されるという学問的方法論に就いて若干の注文を申し上げているのである。神代以来の伝統を保持し、20世紀の今日でも最近まで宮司が町長であって、一切の対立候補の出ないこの島は、今日でも神政政治が行われていたのである。こうした土地の伝統を理解しないで、金印問題を論ずることは妥当な正しい態度とはいわれないであらう。

天明四年(西暦1784)2月志賀島の西岸、叶崎^{かのうざき}の水田の溝の中から3個の石に囲まれるようにして金印が発見された。先ず第一に天明4年とは如何なる年であったかを吟味しなければならぬ。即ち天明3年から5年にかけて所謂天明の大飢饉があり、人肉をさえ食ったと伝えられる深刻無惨の年であった。こうした客観的条件の中で何人が如何



金印出土の地、金印公園

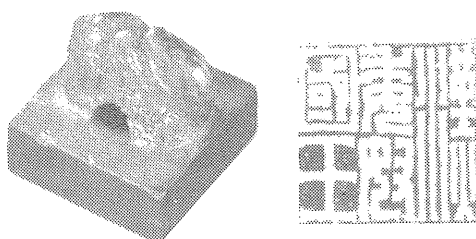
なる理由で純金に近い尊い黄金で偽物を作り、わざわざ離島の人里はなれた地点を選んで埋没したのであるか、およそ偽物の作製には文書であれ系譜であれ、器物であれ、これを作ることによって現世で社会的地位が向上するとか何等かの有形無形の利益を伴うのが常である。発見された金印は今日では一応「漢の委^わの奴^なの国王」と読んでいるが、白鳥庫吉博士は「漢の委^わ奴^な国王」と読んでいた。即ち厳密な意味でいえば何と読んでいいかわからぬものを偽造する如何なる理由と根拠があるか、偽物説を唱える人は先ずこの問題に明快なる解答を与えるべきであろう。志賀島はあくまで漁業中心の島で、僅かに山間のあちこちに漁民の主婦達によって水田、畑地が耕作されている。試みに慶長年間の「筑前国絵図」の示すところに依れば「筑前志賀島百十三石八斗二升」とあり、如何に島の漁民が主食、米に困窮していたかがわかるであろう。金印出土の地、叶崎には十数回調査に出かけたが、

現地は島の丘陵が海岸に迫り、海岸の山麓を削って道路が走っている。恐らくこの地に水田を作ったとしても畳1、2枚位の広さで収穫もよくて1、2升位であったであろう。飢饉が深刻であった事が百姓甚兵衛が藁にでもすがりつく思いで耕作し溝を深くさらえたことによって、偶然金印は地上の光をあびることになった。もともと素朴な農民の甚兵衛はそれが金製品であることに自信がなかったので、兄の嘉兵衛に見せると、嘉兵衛は博多の豪商米屋才蔵の家に奉公していたことがあり、骨董好きの米屋才蔵の鑑定により金製品であることが判明した。

3月16日村長に付きそわれて甚兵衛は郡役所に正式に届け出て、やがて黒田藩主の手に渡り、甚兵衛には米若干俵が与えられ、金印は黒田家の所有となった。若し甚兵衛が一時の欲にかられていたら、国宝第一号の金印は永久に歴史の世界から葬り去られ「楽浪文化流る」のテーマも、私の立論の仕方でも成立しないことになったであろう。

金印は「楽浪文化流る」の第一の先駆者であり、楽浪文化の日本への流動の歴史的証明の貴重な証拠物件であった。

以上の経過は「志賀島某氏所蔵懸幅」に記されている。金印は文字で記された日本最古の文献資料である。金印は日本の曲尺^{かねじやく}の七分六厘の方形で、漢時代の一寸に当たり、「方寸の印」という漢代の規格に該当している印文は「漢委奴国王」の五文字で、これの解釈について黒田藩の学者、青柳信恒はじめ、上田秋成、伴信友等の多くはこれを「漢の委奴国王」と読み、3世紀の魏志倭人伝の伊都国(福岡県前原町)に通じさせていたようである。従って後漢書にある「倭奴国」も「いと国」と読んでいた。明治時代に三宅米吉博士は「委」は「倭」の省画と考え意味は同じとして「漢の委^わの奴^なの国」と読んだ。委を倭と同じに用いた例は聖徳太子自筆本といわれる「三経義疏」の中の「法華義疏」の巻頭のところに「此是大委国^{やまとの}上宮王^{やまとの}集私也、非海彼方本」と記され、大倭国を大委国と記されている。尚中国側の文献、例えば「説文」「經典釈文」の中に其の例がある。ここでいう「奴の国」は後世の難^な嶺^のに当たる筑前平野に展開していた国と考えられ、今日の日本古代史学界の大方の賛同を得ている。



金印、現寸大

三、楽浪文化流るの先駆、金印

—金印真偽論の展開—

後漢書——五倭伝の中に

「建武中元二年(西暦57) 倭の奴の国、貢を奉じて朝賀す、使人自ら大夫と称す。

倭国の極南界なり、光武(後漢の光武帝)賜うに印綬を以ってす」とある。右の記事の意味する所は、倭の奴の国王の使者が大夫と自称し、貢物を奉じて朝賀したので、後漢の光武帝はこれに金印紫綬を授けたのは建武中元2年の事であったというのである。この記事の中に奴の国を以って倭国の極南界と記している事は、事実と相反しており魏志の筆者の明確なる誤伝としなければならない等の問題を含んでいるが、金印が、この記事と合致している事になる。しかし考古学的遺物が歴史上の文献と合致する事は異例に属するともいえるので、この事が学者によっては金印偽物説の一つの根拠とさえなっている。歴史研究はあくまで具体的、個別的史実を探究するのが建前であって、一つの概念的先入観によって判断する事は厳に慎むべきことである。例えば津田左右吉博士が6世紀以前の記紀の神話伝承について虚構なりと断ぜられたことの如きはその著名な例である。

今一つ偽物説の有力な論拠に金印自体が「葉研彫り」という彫り方で彫られており、又印のつまみが蛇をかたどっている蛇紐であるという問題である。中国の斯界の権威、元代の金石学者、吾丘衍の学古篇によれば「諸侯王の印は駝紐、列侯は亀、將軍は虎、蠻夷は蛇嵌蛇兔の属、その字は白文、侯印は範中にて鑄る。軍中の印は皆鑿で、官の重いものは両鑿官の卑いものは尽く一鑿」とある。以上

の規格に準ずれば金印は侯王の印に相当するので鑄造されるのが規定であるが、発見された金印は鑄造でなく両鑿即ち葉研彫りであり、紐も侯王の印であれば、駝か少なくとも亀でなければならない。この2つの金印の条件を兼ね備えていないのであり、破格であり偽造説の出で来る所以である。この鑿と紐の持つ二つの矛盾点について明快なる解明を試みたのが東洋考古学者駒井和愛博士であった。博士の学位論文「中国古鏡の研究—昭和38年出版」に私は特に深い感銘を受けた記憶がある。

博士は漢代の歴史家班固の前漢書地理志の記事、「楽浪海中倭人有り、分かれて百余国をなす、歳時を以て来り獻見すという」とある文を引用している。ここにいう楽浪は、前漢の武帝が西暦前108年、衛氏の朝鮮を亡して漢の植民地四郡即ち楽浪郡、真蕃郡、收屯郡、玄菟郡を置いたが、四郡を治める郡治(役所)を楽浪郡においた。従って楽浪郡は政治、文化の中心となり、西暦313年北方の高句麗に併合されるまで約400年間にわたって漢文化の中心地となった。1916年以降、日本の学術調査によって遺跡、遺物が続々発掘発見されるに至って、一躍世界的に楽浪文化の令名が知られるに至った。楽浪郡を韓国語で R(N)ak - r (N) ang - kun と呼び中国語で Le - lang - chiin と言っている。楽浪文化には倭と呼ばれた日本人がはじめて接触したことを文献資料として示したものが志賀島の金印であった。駒井博士は「以歳時来獻見云」の記事の「云」という字を重く考えて、これは筆者の班固が首都洛陽で伝聞を筆録したことの何よりの証拠とされている。従って後漢の建武中元2年の場合も倭の奴の国王の使者も、後漢の都洛陽に行ったのでなく楽浪郡か帯方県に行き、漢王朝承認の上で、楽浪礼官を経て帯方県令から授与されたのであろう。以上の駒井説が容認されるならば、「急就章」の規定により、軍陣の際の任命、出先機関の急場の間に合せのものとして鑄造に代るものとして、鑿の重いものとして両鑿即ち「葉研彫り」は容認されるものとなるし、対象が「蠻夷の王」であるから蛇紐で何等差支えないことになる。現に存在する金印の形状の実態について、2つの難点を実に明快に説明されている。尚、漢周辺の国として韓人の例をあげ

て、後漢書韓伝に「建武中元二十年韓人が楽浪に詣^{まい}って貢献した」の例をあげている。附言すれば蠻夷の王に金印という異例の措置をしたのは、奴の国王が朝貢はするが属国ではないという立場、中国側からいえば「不臣の朝貢国」であったことを意味し奴の国王の地位を漢王朝が高く評価していた事を物語っている。

今一つ後藤博士の論難の点に、出土地、志賀島が奴の国からいえば避遠の地である点である。奴の国が今日の筑前平野に展開していた国であることは、白鳥博士等の一部の人を除けば一応容認されている。

福岡市南郊の春日市須玖岡本附近からは、ドルメン、甕棺等から多数の漢式鏡等が出土しており奴の国王にふさわしいものであるので、多分この附近が奴の国王の首都らしく思われるので、この附近から出土しておれば、後藤博士も或は異論をさしひかえられたかも知れない。偽物説にきびしく対決された中山平次郎博士も、この点に就いて大いに苦慮された様である。然し出土地が志賀島であることは動かし難い事実である。中山博士は、多分奴の国に内乱が起り、始末に困った国王は避遠の地志賀島に隠匿したのであろうという内乱説をとられた。然し奴の国に内乱が起ったという学問的な根拠となる形跡はどこにもないのであって、万策つきての中山博士の憶説といわれても仕方がないであろう。私は現地百回主義は歴史の研究にも極めて有意義な方法であると考えている。

さて金印出土地 叶崎^{かきさき}は志賀島の西端^{さき}にあって、眼前に横たわっている「防人の島」能古島の防人がいたと具体的な地名をあげて万葉集にうたわれている「也良岬」の二点間が一番狭い海峡をなしている。也良岬の丘陵の上から志賀島の叶崎を何回か眺めたことがある。この山上からは肉眼でどんな小さい船が外海から博多湾に侵入することを見のがすことはない。奴の国と漢の植民地楽浪とを結ぶ海上交通は湾口にある志賀と能古の二島に完全に制約されている。というより奴の国王の使者は志賀島を拠点とする阿曇氏の率いる海人部族の協力なくしては玄海の怒涛を乗り切ることは不可能であったであろう。奴の国王と楽浪郡とのつながりは、一面奴の国王と志賀島の阿曇氏との関係が深くかかわっていた事を示唆している。古事

記、日本書紀の記載によれば海人部族の神ワタツミの神はイザナミの神の「みそぎ」から生まれた神、即ち海を母胎とする神でその神名のワタツミも、ワタ即ち海をツミ即ち支配する神という意味で、海上を生活の舞台とする海人部族の守護神であり、また、阿曇氏の祖神である。従って阿曇氏は代りに、志賀海神社の官司職を継承しワタツミの神の後裔として現在にいたっている。この島では神話は実在し又歴史の継絶はない。

海人部族は遠く南方より黒潮に乗じて八重の潮路を押し分けて来り、志賀島を本郷として活躍し最盛期には北九州の沿岸から瀬戸内海、近畿の太平洋岸の海上交通と漁撈を支配した部族であった。原始日本国家成立に重要な役割をはたしていた事は、記紀の古典に記るされている。奴の国王の使者が楽浪貢献の任務を恙なく果し得たのも、金印紫綬を受けた使者が無事帰国し得たのも、たくましい海人部族の協力なくしては出来なかったであろう。

奴の国の入貢後、50年すぎた永初元年(西歴107)に漢に入貢したのは倭国王帥升であった。奴の国王が入貢した時点では倭国は小諸国に分裂している時で、奴の国王の入貢はそうする事によって自らの権威を誇示することができたのであった。然し50年後には倭国王帥升なるものの出現でその地位はとって変られたのである。倭国が如何なる国であり帥升が如何なる人物であったのか。問題は残るにしても入貢の対象はまだ漢であって金印保持とその権威はまだ存続していたのであろう。然るに西歴220年、後漢は滅亡し中国は3分して魏、呉、蜀の3国鼎立時代に入り、殊に楽浪帯方の支配権は北支の魏に移り我国は魏志倭人伝の伝える所によれば、3世紀耶馬台国の女王卑弥呼の時代になった。

北九州の小諸国は奴の国を含めて、女王の代理人、一大率^{もつ}の支配する所となった。奴の国と耶馬台国の関係は宗主国と属国の関係になっていたことであろう。

女王卑弥呼は魏の皇帝から親魏倭王の称号を受け印綬を賜っている。女王国が南方の狗奴国の反乱に際してその対策に苦慮して、魏の植民地となっていた帯方県(ソウル)の太守弓遵に苦衷を陳情しその援助を求めている。こうした国際、国

内情勢の中に於て半独立の状態にあった奴の国王にとって、金印は既に過去の栄光を語るものであっても、前王朝の漢の金印を身近に保持することは親魏倭王の称号さえ保持している女王卑弥呼に対してはばかり多いものがあったであろう。かくて奴の国王は、かつては奴の国王の地位を高らしめた象徴的存在の金印の処置に苦慮したのであろう。万一の場合を考えて、奴の国王の墳墓に埋蔵することさえ遠慮したのである。その結果金印を奴の国に持帰った最大の功労者の海人部隊の拠点である神の島、志賀島の海上交通上の最重要地点の叶崎の丘陵に3個の石に囲むという形の敬虔な地中への埋蔵の仕方をしたのであろう。金印は既に使命をはたしたのであるが、今は魏との交流をする耶馬台国の船、その船の実体は昔と少しも変わらず阿曇氏の率いる海人部族のあやつる船の運行を蔭乍ら守護していたことであろう。たとえ耶馬台の女王の命令であっても、荒海玄海の渦巻く激しい潮流と風波を乗り切る操船技術を身につけたものが海人部の他にいたであろうか。

尚此の島から金印と同時代に属する細型銅剣の鋳型が発見されているし、又時代は下るが島の北部から古墳が発見されている。以上の歴史地理的条件を考えれば、志賀島を奴の国の単なる避遠の地と解することは妥当ではない。むしろ金印出土地としての条件を備えている事を後藤、中山両博

士に提言したい。

私は前回碁磐式支石墓から磨製の柳葉形石鏃を発見し韓国南部で発見されたものと同系統のものと指摘したが、尚北九州から抉入りの石斧が多く発見されているが、此れ又韓半島から対馬を経て北九州に移入された木工具である。中国の青銅器類も半島を経て吾国に流入しているが、特にとりあげたいのは貨泉である。前漢王朝を倒して「新」という新王朝を樹立した王莽が天鳳元年に鑄造させた孔あき銭の「貨泉」が、釜山の金海貝塚済州島、対馬の豊玉のシゲノダン、壱岐の原の辻、福岡西郊の御床松原、熊本の隈府、広島津ノ郷、大阪の瓜破、京都の函石浜などの弥生式の遺跡から発見されている。宛かも大和への文化流通の経路を示しているかの感がある。その外青銅器の短剣、矛、戈、鏡等がある。倭人は南韓の人達から楽浪郡帯方県のあることを聞いたであろうし、その目的とする物は色どり多い小玉や鏡等を求めて遠く漢江くんだりまで行ったのであろう。

(未完)

* 武藤正行：日韓古代文化同源論、日韓トンネル研究会中間報告会資料（昭和58年度）昭和59年1月25日に記載



◀和都美神社

豊玉町の象徴である和都美神社は彦火火山見尊と豊玉姫命をまつる海宮の史跡である。本殿正面の浜に立つ鳥居は、満潮時には、二メートルほど海中に浸り波静かな浅茅湾と合せて遠く神話の時代を偲ばせる。

